



浜小だより

茅ヶ崎市立浜須賀小学校

2025年6月30日

7月号

学校教育目標 「未来をひらく浜小の子」～遊ぶ 学ぶ 助け合う～

校長 青柳 和富

「人のせいにしない」

本校の子どもたちはよく話を聞けます。画像（粒子加工）は、6月に行った校内授業研究の1シーンです。仲間の発表を、しっかりみんなが聞こうとしている様子が伝わるかと思います。



「教育と掛けて盆栽と解く。その心はどちらも〇〇と△△が基本です」という謎かけがあります。解は…、「待つ（松）」と「聞く（菊）」です。この謎かけは教師のあるべき姿勢を説いたものですが、そのまま子どもたちにも当てはまります。話を聞き合える学級では、間違えても否定されませんし、無理に声を張る必要もないため、どの子も安心して話せるようになります。

700人以上の児童が一堂に会する集会でも同様です。多人数ならではのざわめきこそありますが、誰かが話を始めようすると、そのざわめきが、波が引くように収まっていきます。児童会が主催する「全校集会」では、大人がマイクを握らなくても、会が穏やかに進行していきます。こうした「主体的に聞こうとする」雰囲気をつくれるところは、本校自慢の文化の一つであると常々感じています。

とはいえ、どの場面でも子どもたちが話を聞けるというわけではありません。興味を持ちづらい（？）

授業ではあくびが出ますし、終業式など儀式のある日の朝には、「校長先生、今日のお話はできるだけ短めをお願いします」となどというリクエストが朝の挨拶がわりになることもあります。教育の現場でよく話題になるのは、「子どもたちが話を聞かないのは誰のせい？」という課題です。つまらない授業（話）をする先生（校長）のせいなのか、それとも話を聞けない子どもたちのせいなのか。そもそも教員の授業力（話力）についても子どもたちの聞く力についてもそれぞれ質を高めていかなければならないのが学校ですが、実は、この問いにはあるメッセージが隠れています。それは、「人のせいにしない」というメッセージです。

大人であれ子どもであれ、話を聞いてもらえないのは、話し手側（タイミング等含む）に課題があることが多いです。一方、話の趣旨を捉えたり行間の意味を読んだりできないのは、聞き手側の課題でもあります。それぞれに原因があるということです。

昨今、うまくいかない原因を自分以外の環境や他人のせいにする風潮を感じられる方も多いのではないのでしょうか。原因を自分以外とすることで自らの責任を回避するわけですから、気は楽になるでしょう。しかし、それ以外によいことは何一つありません。自分が原因ではない → 自分を変えようとはしない → 自分が成長できない、となるからです。

また、そういう人は被害者意識にも陥りやすく、結果的に自分も他者も「嫌な思い」に終始します。

雨が降っても自分のせい

松下幸之助

松下幸之助さんの境地には至りませんが、何かがうまくいかないとき、まずは「自分にも原因があるのではないか」と考えてみるのが、自分を成長させることに繋がります。皆さんはどうお考えになりますか。こう書いている私自身、とても耳の痛い話です。